

感性とは何か

—— シャーロット・スミス『セレスティナ』を考える ——

高 橋 み どり

On “Sensibility” in Charlotte Smith’s *Celestina*

Midori Takahashi

序

「感性」を示す語 “sensibility” を、OED で調べてみると、その中に18世紀と19世紀の初期に使われ、その後はあまり使われなくなった意味がある。それは、「感情を洗練された形で持つ能力、繊細な審美眼、また苦しみに共感する心や文学や芸術における哀しみに心を動かせる能力」(“Capacity for refined emotion; delicate sensitiveness of taste; also readiness to feel compassion for suffering, and to be moved by the pathetic in literature or art.”) である。¹ ロマン主義を研究するアデラ・ピンチ (Adela Pinch) によれば、1797年の *Encyclopaedia Britannica* では、“sensibility” を「神経のありようと関係あると思われており、喜びや悲しみ、美あるいは奇形に対し繊細に見ることのできる知覚能力」(“a nice and delicate perception of pleasure or pain, beauty or deformity” which “seems to depend upon the organization of the nervous system.”) (下線筆者) と定義したという。² 上記の OED と意味はほぼ同じといえるが、異なる点は「神経組織」(“the nervous system”) という語が加えられていることである。この理由を述べるためには、当時の時代背景を振り返る必要があるだろう。

この「感性」は、18世紀中頃ヨーロッパを中心に広まった文学のみならず文化の動向であり、その影響は19世紀中頃まで持続した。³ とりわけ18世紀末のイギリスで絶頂期を迎えた。それ故、例えばジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の『分別と多感』(*Sense and Sensibility*, 1811) において、“Sensibility” を単なる日本語の「感性」の意味に置き換えて解釈するだけでは、作品の十分な理解につながらないのである。

感性が尊重され、一つの流行現象となった背景には、当時の哲学的・思想的傾向や、宗教的動向、政治的・社会的状況との関連性がみられる。

17世紀末ロック (John Locke, 1632-1704) は、生得観念の存在を否定し、観念が経験に由来することを明らかにしたうえで、観念の起源として「感覚」(“sensation”) と「内省」(“reflection”) をあげた。ロックの後継者ヒューム (David Hume, 1711-76) は、観念の起源として「印象」(“impression”) をあげ、それを「感覚」の印象と「内省」の印象とに区分し、内省の印象は、感覚の印象が残す観念から生じるものとした。ヒュームは、ロックと異なり、感覚が内省に対して優位に立つと考えたのである。⁴ 感覚を重視する傾向は、科学や医学の分野における変革とも密接に関連している。近代科学の祖ニュートン (Sir Isaac Newton, 1642-1727) の、神経組織を身体における感覚の容器としてみる考えに従い、18世紀の医師や科学者は、他の人と比較した場合に、より敏感な「管」と「活発な流動体」を持っている人がおり、従ってそのような人の身体は、神経組織の振動をより素早く伝達することを立論した。敏感な身体を持つ人物は、感性もいっそう優れているが、興奮、憂鬱、狂乱状態に陥りやすいとされた。⁵ 前述の *Encyclopaedia Britannica* (1797) の定義に「神経

組織」(“the nervous system”)という語が加えられている理由は、当時このような考えが流布していたからであろう。18世紀に感性が重要な概念となったのは、主に生理学、認識論、心理学の分野であると、18世紀の感性と文学について研究したアン・ジェシー・ヴァンサン(Ann Jessie Van Sant)は述べている。⁶

しかし感性を語る上で、道徳観や倫理観との関係を無視することはできない。18世紀前半ヨーロッパで莫大な人気を博し、フランスやドイツの近代思想に重大な影響を及ぼした哲学者シャフツベリ(Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, 1671-1713)は、人間本性が道徳的に善であるとし、友情や同胞愛といった利他的感情こそ人間のもつ自然感情であると考えた。また道徳感覚(“moral sense”)、すなわち対象が現れるや否やその美醜善悪を見抜く力を、自然によって万人に等しく与えられた生得の能力と考えた。グラスゴー大学の道徳哲学教授であったハチソン(Francis Hutcheson, 1694-1747)も、道徳感覚を彼の哲学の核心においた。しかしシャフツベリの道徳感覚が一種の直観能力とみられるのとは異なり、ハチソンの道徳感覚は、いわゆる五官のような感覚能力と考えられている。グラスゴー大学でハチソンに学んだスミス(Adam Smith, 1723-90)は、この思想に影響を受けながら、さらに利己的個人を社会へ統合する原理として、同感(“sympathy”)、すなわち他者の状況や感情を想像できる能力を中心に置いた。こうして、感性を尊重する倫理観が育まれていった。

宗教界では18世紀末、メソジストや福音主義など、プロテスタントの動きが活発になったが、彼らは信仰に対する個人の主観的で感情的な体験を強調した。このことも感性崇拜と無縁ではない。

感性はまた常に政治と密接な関係を持ってきた。感性尊重の文化では、他者の人道主義的感情を重要視することから、ヨーロッパとアメリカの自由主義や共和主義の政治の発達へと連関していった。そして、フランス革命(1789-99)との関係を抜きにしてイギリスにおける感性を語ることはできない。フランスでは、革命支持者は、感性の時代の最も卓越した作家であるルソー(Jean Jacques Rousseau, 1712-78)の著書に鼓舞された。ルソーは、『人間不平等起源論』(*Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, 1755)や『社会契約論』(*Du Contrat Social*, 1762)で民主主義理論を唱え、『新エロイズ』(*Julie, ou la Nouvelle Héloïse*, 1761)では情熱の解放を謳い、ヨーロッパの小説家に強い影響を与えた。イギリスの革命支持者もこれに共感したが、革命反対者の攻撃的となったのは、その感性であった。革命支持者の感性は過度で間違った方向に向けられているとして、イギリスには反「感性」(Anti-Sensibility)の動向も生まれた。

感性崇拜の傾向には、18世紀に起こった多くの社会的変化、特にヨーロッパとその植民地の経済的变化も影響している。18世紀のヨーロッパは、アジア、アフリカ、南北アメリカの征服地から、砂糖、香辛料、布、その他贅沢品などが大量に流入され、徐々に消費社会となった。とりわけイギリスにおいては、中流階級が富裕になり、その結果文化的で洗練された生活を送る有閑な人々が出現した。社会階級や社会的地位は、18～19世紀を通して依然として重要であったものの、こうした新しい消費社会は、中流階級の人々の広がりつつある公的な世界において、善良な心、趣味のよさなど、人がもたらす本来備わっている性質に応じて、個人を評価するようになった。この上なくすぐれた感性は社会的栄誉の象徴だったのである。⁷

この新たに富裕になった社会においては、男女両方にとっての新しい性差による役割も生み出され、ここで再び感性は変化に一役買った。中流階級の家庭では、生活が楽になるにつれ、妻や娘に貴族の女性の生活様式を取り入れた社会的な居場所を作ろうと努めた。18世紀後半、女性は生来感傷的な生き物であり、その涙や赤面が、家庭的な美德や思いやりのある心の証であると主張した、大量の論文が発表された。男性の理想像も、厳格で禁欲的な男性ではなく、他者に対する共感を持ち、人との関わりを大切にする社交的な感情にあふれた男性に変化した。⁸

小説のジャンルにも、“novels of sensibility”が現れた。“novels of sensibility”は、繊細な感性を重視する小説で、“sentimental novels”や“novels of sentiment”とも呼ばれる。サミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson, 1689-1761) の『クラリッサ』(*Clarissa*, 1747-48)、ロレンス・スターン (Laurence Sterne, 1713-68) の『センチメンタル・ジャーニー』(*A Sentimental Journey*, 1768)、ヘンリ・マッケンジー (Henry Mackenzie, 1745-1831) の『感性の人』(*The Man of Feeling*, 1771)などが代表例として挙げられるが、その他女性作家による作品も数多くみられた。

このように、様々な分野に多大な影響を与えながら、一世を風靡した感性崇拜は、19世紀になると、情緒や道徳、芸術に関連するとしたその包括的な意味合いは廃れていく。1862年の *Chambers Encyclopaedia* では、‘sensitivity’は単なる生理的な知覚能力として定義されたが、この流れは情緒に対する、より近代的な心理学的・唯物主義的理解が進んだ影響であるとピンチは分析する。⁹

以上見てきたように、感性とは、時期によりその定義も異なり、またその関連性が、生理学や心理学など医学や科学、認識論や道徳哲学などの思想や哲学、政治や社会状況など多岐に渡るため、複雑性が増すこと、また感性崇拜の立場か否かにより、その捉え方も異なることなどから、定義することは難解である。試みとして、当時の小説の中で、感性がどのように描き出されているのか検証してみたい。個々の作家により、その定義が異なることが予測されるが、本論文では、感性の擁護派と反対派の間の論議が最も盛んであった頃の“novels of sensibility”の中から、シャーロット・スミス (Charlotte Smith, 1749-1833) の第三作の小説『セレスティナ』(*Celestina*, 1791)を取り上げる。

ここで作者について少し触れておきたい。シャーロット・スミスは、地主の長女として生まれ、6歳で寄宿学校に入学し、12歳でロンドンの社交界にデビューした。15歳で東インド会社の重役リチャード・スミスの息子ベンジャミンと結婚し、22年の結婚生活の間に、12人の子供を出産した。1776年に義父リチャードが亡くなると、遺産を孫たちに相続させるという遺言の有効性と、西インドの彼の不動産をめぐって訴訟が起こされ、精神的かつ経済的にも大きな負担となって、シャーロットの肩に重くのしかかる。その一方で夫ベンジャミンは多額の借金を抱え、1783年にキングズ・ベンチ監獄に投獄され、彼女も夫と7ヶ月そこで暮らした。1784年夫の釈放直前にシャーロットは『哀しみのソネット』(*Elegiac Sonnets*)を上梓する。洗練されたソネットに託された哀愁と、自然描写の卓越によって『哀しみのソネット』は評判となり、たちまち五版を重ねた。夫の釈放後、スミス一家は債権者から逃れるようにフランスに渡る。そこでシャーロットはアベ・プレヴォーの『マノン・レスコー』の英訳 (*Manon Lescaut*, 1785) に取り組んだ。帰国後は、金銭問題をはじめとする様々な事情から、1788年に夫との離別を決意する。彼女はブライトンに、夫はスコットランドに移り住んだが、その後も夫からの金の無心はつづいた。

この時までには、12人いた子供のうち3人が病気のため他界していた。それでも9人という大勢の子供たちを女手ひとつで養うべく、シャーロットは『エメリン』(*Emmeline*, 1788)、『エセリン』(*Ethelinde*, 1789)、『セレスティナ』(*Celestina*, 1791)、『デズモンド』(*Desmond*, 1792)、『古いマナーハウス』(*The Old Manor House*, 1793) といった具合に39歳から5年間、毎年1作ずつ小説を発表した。社会批判、フェミニスト的問題への関心、アメリカ独立革命やフランス革命に関する政治的問題が盛り込まれた11作の小説がある。彼女の小説は、感傷的でゴシックの要素が含まれているが、悲惨な結婚生活や、無責任な男性登場人物を描くのに、自身の経験も生かしているといわれる。¹⁰

『セレスティナ』(*Celestina*, 1791) は、孤児であるヒロインが、様々な紆余曲折を経て、愛とアイデンティティを獲得する物語である。恐怖の舞台となる森、城、修道院、典型的な登場人物である、処女、暴君、恋人、テーマとしては、近親姦、秩序侵犯と回復など、ゴシック小説の要素もふ

んだんに盛り込まれているが、感傷小説としての性質も併せ持つ。18世紀のゴシック小説を研究したエリザベス・R・ネイピア (Elizabeth R. Napier) によれば、ゴシック小説家の多くは、感傷小説の手法にも長け、同様に感傷小説家はゴシックの技法を自在に使うといった具合に、両方のジャンルは重なる部分が多いという。¹¹ ゴシック小説は、感傷小説のように、若い不幸な二人の恋愛がプロットの中心を占め、失神や憂鬱に浸る場面も頻繁に登場する。

ロマンスの色合いが濃い、ノヴェルの主要素といわれる写実性も併せ持つ点が注目に値する。ゴシックの中にノヴェルの色彩が強い作品といえば、この作品以前では、クレアラ・リーヴ (Clara Reeve) の『イギリスの老男爵』 (*The Old English Baron, A Gothic Story*, 1778)、またシャーロットと同時期では、アン・ラドクリフ (Ann Radcliffe) の『ユードルフォの謎』 (*The Mysteries of Udolpho*, 1794) などが例に挙げられる。シャーロットも、これらの作家と同様、ロマンス独特の超自然をノヴェルの写実にいかに違和感なく織り込むかに取り組んだ作家といえよう。

シャーロットの作品を論ずる時、政治への関心についてふれない訳にはいかないであろう。彼女は、この作品が書かれた前年頃より、革命支持派になっていった。『セレスティナ』には、アメリカ独立戦争に関係した人物や、フランス革命の話題も登場する。

前二作と同様、『セレスティナ』は概ね好評で、シャーロットの名声をさらに高めた。1791年11月のウィグ党・非国教会派系の急進的雑誌『マンズリ・レビュー』 (*The Monthly Review ; or Literary Journal*) は、“the sentiments are such as could only have been dictated by true sensibility ; the descriptions of natural scenery are elegant and picturesque.”¹² と、「真の感性の指示に従うことによってのみ可能なその洗練された感情と、優美でピクチャレスクな自然の風景描写」を絶賛した。またジョンソン書店が発行し、急進主義者たちが多く寄稿した、『アナリティカル・レビュー』 (*The Analytical Review, or History of Literature, Domestic and Foreign*) の 1791年8月発売号には、編集に関わっていた女権拡張論の先駆者メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) の書評が載っている。他の人気作家の作品との類似性が強い点を欠点として指摘しているものの、シャーロットの才能は高く評価した。¹³

では、これから『セレスティナ』の主要登場人物の感性を、男女の差異についても考察するため、男女それぞれについて詳細に検証してみたい。¹⁴

1. 主人公セレスティナ—感性と理性

セレスティナは、オースティンの作品にしばしば見られるような、失敗を繰り返しながら成長するヒロインではない。物語の最初から、「極めて強い感性」 (“extreme sensibility,” 81)、「思いやりの気持ちが強い」 (“strong and excellent understanding,” 100)、「良識の結果である、決断力に富んだ気性」 (“a decisive spirit, the effect of her good sense,” 317) といった美点を、作者により賦与されている。注目すべきは、作者が “sensibility” という語を使うのは、ほとんどセレスティナの性格描写の場合に限られることである。セレスティナの行動や感情の描写を分析することにより、作者の考える感性の本質が明白になるのではないか。

セレスティナは、非常に読書家で、詩作を好み、イタリア語も得意な、文学的素養に溢れた女性である。感性に富む登場人物は、文学を愛し、時代に対する思慮深い観察者であり、詩人、あるいは少なくとも詩的表現ができる。また自然を愛し、美術あるいは音楽を好む。¹⁵ セレスティナの人物設定は、この条件に一致している。

彼女の他者に対する思いやりは、詳細に描写され、殊のほか強調されている。敏感な彼女は、自らも苦悩する者として、他者の悲しみにも同情的である。乗り合い馬車で知り合った召使のジェシー

や、後にスコットランド行きへ同行するエルフィンストン夫人などとの交流は、困難な環境の中で、相互に助け合う女性同士の友情として描かれる。また女性に対してだけでなく、男性に対する思いやりも深いが、自分を慕い、執拗なまでに追いかけてくるモンタギューに対しても優しく接する。

感性にあふれたセレスティナは、また一方で、ゆきすぎた感性に溺れることの危険も、直感している。育ての親ウィロビー夫人亡き後、ウィロビーから愛を告白されるが、夫人は彼にセレスティナとの結婚を禁じていたこともあり、育ててくれた夫人への義理から、彼の申し出を断る。

A conflict then began between the affection for him and her duty and gratitude towards the memory of his mother, which was almost too severe to be endured ; but however soft her heart, her reason was equal to the task of checking a dangerous or guilty indulgence of that sensibility ; and after long arguing with herself, she found she loved Willoughby better than every thing but his honour and his repose. (99) (下線筆者)

感性は容易に破壊的になりうる不安定な特質があるため、作者は、感性の持ち主であるヒロインを通して、それにふけることを良しとせず、過度にならないよう、理性によって抑制することの重要性を訴えている。作者の考える理想的な女性像は、感性と理性の均衡を保てる女性であり、セレスティナは完璧なヒロイン像といえるであろう。女性のあるべき姿が提示されていることから、この作品が教育小説 (didactic novel) の要素も含んでいるとも解釈できるかもしれない。

感性と理性に対し、どちらか一方を支持するのではなく、両方を認めようとする独特の態度は、アン・ラドクリフの作品にも見られるものである。¹⁶ この態度は、オースティンの『分別と多感』にもつながっていくものといえよう。18世紀末すでに複数の女性作家が、このテーマを取り上げていたことは、注目に値する。

2. セレスティナを取り巻く3人の男性たち

(1) ヴァヴァサー—感性の欠如

この物語で、セレスティナは3人の男性から求婚される。それぞれの男性の行動あるいは感情については、詳しく描写されているので、この3人の男性登場人物の感性を考察してみたい。最初に、明らかに感性が欠如していると思われる人物を検証することにより、感性の本質が浮き彫りになると思われる。それでは、ウィロビーの友人、ヴァヴァサーについて考えてみよう。

ウィロビーが妹マティルダの持参金を払わなければならなかった時、余裕のない彼に金を貸したのは、ヴァヴァサーだった。その後セレスティナに結婚を申し込むウィロビーに付き添った際、ヴァヴァサーは、セレスティナの魅力に惹かれ、恋に落ちる。いたたまれなくなったヴァヴァサーは、ウィロビーとセレスティナの結婚式を直前に控え、突然二人の元を去る。ここまでは、ヴァヴァサーが、ウィロビーの親友として、信頼されており、友情と愛情の板ばさみで苦悩する姿が描かれており、一見すると情感が豊かな人間のように思われる。

しかし、ウィロビーが結婚式の前日忽然と姿を消してからヴァヴァサーの行動は、情念に突き動かされたものとなる。

セレスティナは、結婚式に立ち会うはずだった牧師ソロルドの家で世話になることにしたが、そこにヴァヴァサーが彼女に会いにやって来る。ヴァヴァサーは、ウィロビーが彼女との結婚を拒否したのだと考え、自分が代わりに結婚したいという意志がある。ヴァヴァサーは、同じくセレスティナに夢中になるソロルド家の次男モンタギューと会った瞬間から、お互いに嫌悪感を抱き、敵愾心

を顕わにする。ヴァヴァサーは、彼女にプロポーズし断られるが、容易に彼女をあきらめることはできず、ソロルドと決闘する。

ヴァヴァサーは、酒や女性、賭け事に溺れる、放埒で軽薄な人物として描かれている。彼は自らの情念に突き動かされ、外向的に行動する型の人間といえよう。しかしあまりに自分の欲望を満たそうとする感情が顕わになるため、対人関係においては、自己中心的で、相手に対し威圧感を与え、配慮に欠ける。たとえば、エルフィンストン夫人が不慮の事故で夫を亡くしたことで、周囲の人々も落胆していることに気付きながらも、いつもと変わらない騒々しい様子でしゃべりまくるヴァヴァサーに、セレスティナは不快感を抱く。

... rattling on his usual wild way, though he saw the dejection and concern of the party ; a circumstance that more than ever disgusted Celestina, who began some time before to doubt whether the credit which Vavasour had for good nature was not given him on very slender foundations : for to be so entirely occupied by his own pleasure and pursuits as to be incapable of the least sympathy towards others, to be unable or unwilling to check for one moment his vivacity in compliment to their despondence, seemed to Celestina such a want of sensibility, as gave her a very indifferent opinion of his heart. (347) (下線筆者)

自分だけの快楽や気晴らしに心を奪われ、他者に対しての同情（‘sympathy’）をほんの少しも持たず、落胆している人々に対して、自らの快活さを抑える配慮もできないヴァヴァサーに対し、セレスティナは、感性の欠如（‘such a want of sensibility’）と批判的な目を注いでいる。同情は感性に優れた人物には欠くことのできない資質である。

また、モラルの欠如を、セレスティナから鋭く指摘される場面もある。長い間セレスティナの元を訪れなかったヴァヴァサーが突然現れ、一年近く共に暮らしている愛人の存在と、彼女が瀕死の状態であることを告げた後、セレスティナにプロポーズする。セレスティナはすぐに拒否し、厳しい口調で、“My objections... are, to your morals — to your principles...” (406) と、そのモラル、すなわち行動の基準が不服なのだとヴァヴァサーに言い放つ。しかしヴァヴァサーは、周囲の人間と比較すれば、自分はモラルのある方だと言い逃れ、セレスティナの発言を真剣に受け取らない。感性には、道徳性も含まれるので、モラルの欠如は感性の欠如を意味する。感性は、道徳や階級など多くのものを識別する印であった。¹⁷

セレスティナから感性に欠けると評された、ヴァヴァサーの行動や性質を分析することにより、彼に欠ける同情やモラルは、感性を持つ人物の重要な資質であることがわかる。

(2) モンタギュー—感性と情念

次に挙げるのは、感性が全く欠如している訳ではないが、“novels of sensibility” のヒーローとて言い難い男性登場人物、モンタギュー・ソロルドである。結婚式が急遽中止となり、しばらく自分の家に滞在することになったセレスティナを一目見た途端、モンタギューは心を奪われる。セレスティナの外見の美しさに引かれる兄ソロルド大佐に対し、モンタギューは、その衰弱した様子の「感傷的な印象」（“a sentimental effect,” 180）に関心を持つ。そして彼女が読書家で、詩を愛好し、イタリア語を理解できること、つまり彼女の知性が外観の気品と一致することに気づき、モンタギューの彼女に対する賞賛は一気に高まる。ソロルド大佐にとっては、これらの特徴はそれほどの印象を残さない。モンタギューとセレスティナは、文学的素養があり、読書や詩の創作を好む点

においては、趣味が一致している。モンタギューは、彼女と本について話したり、写生する彼女のために、花を集めてきたりする。セレスティナに自分のイタリア語のアクセントを直してくれと乞うが、彼女に断られると、今度は詩を暗唱してくれるよう懇願する。彼の熱心さに負け、彼女は口ずさみ始めるが、途中詩と自分の心情の一致に感極まり、続けられなくなる。モンタギューはその様子にますます心引かれる。審美眼や鑑賞力も含む ‘taste’ は、感性の重要な一要素であるが、モンタギューは ‘taste’ を持つ人物として描かれる。このことは彼に感性が備わっていることを明示する。

また、モンタギューは、ヴァヴァサーと異なり、ヒーローの条件である他者に対する思いやりも持っている。夫が急死し傷心のエルフィンストン夫人の元に、毎晩訪れ本を読み聞かせ、彼女を慰める。またウィロビー夫人の旧友で家族のいないレディ・ホレイシオに対しても、定期的に訪問し、本を朗読したり、会話の相手になったりと、彼女の気をそらさない。

しかし、ヴァヴァサー同様、モンタギューの性格描写は、感性以上に、情念が強調されている。モンタギューの情念が急速に強まっていく過程は、詳しく描写される。セレスティナにあからさまに夢中になるモンタギューを心配した父は、モンタギューに警告を与える。モンタギューは、セレスティナに求婚をしないことに関しては、比較的簡単に約束したが、情念に溺れないとは約束しなかった。もう彼を抑制するのには手遅れだった (“The young man readily promised what at the moment he was sincere in, that he would not make love to Celestina ; but he did not promise not to feel the passion, against which it was too late already to guard him.” 186) (下線筆者)。モンタギューはもはや情念の虜と化し、それに身を任すことに決めた (“Nothing, therefore, interrupted the progress of that serious passion, which Montague Thorold determined to indulge, and of which Celestina was perfectly unconscious.” 187) (下線筆者)。その後エルフィンストン夫人のスコットランド行きに同行するため、セレスティナがソロルド家を出ると、モンタギューは彼女の思い出の品の数々で、自らを慰める。彼女が落としたハンカチに、彼女が書いたソネットをくるむが、これは鉛筆で書かれていたので、牛乳に浸して消えないようにしてあった。その他彼女が描いたスケッチ、彼が描いた彼女の横顔のシルエットを一まとめにし、ふところに入れ携帯していた。このような行為は、「恋愛の情熱の他愛もない偶像崇拜」 (“the fond idolatry of romantic passion,” 252) (下線筆者) と表現される。父は、学業や学友がモンタギューを「不毛な情熱に身を任すこと」 (“the indulgence of a fruitless passion,” 253) (下線筆者) から引き離してくれることを期待していた。しかし、モンタギューのセレスティナへの思いは募るばかりで、狂気じみているほどであり、その様子はドン・キホーテにたとえられる。

... Montague Thorold ; who if he loved her before with an attachment fatal to his peace and subversive of his prospects, now seemed to idolize her with an ardour bordering on phrenzy. In despite of the resolution she had avowed to him, in despite of those he had himself formed, this ardent and invincible passion was visible in every thing he said and did. He seemed to have forgotten that he had any other business in the world than to serve her, to listen to the enchantment of her voice, to watch every change of her countenance. His whole being was absorbed in that one sentiment ; and though he had promised not to consider the advantages, which his own wild Quixotism, aided by accident, had thus obtained for him, as making the least alteration in the decided preference of Celestina for another, he insensibly forgot, at least at times, her unalterable affection for Willoughby. (313) (下線筆者)

モンタギューは、セレスティナのことを考えると何も手につかない状態で無為に過ごしている。情念に浸る(“indulgence”)のは、自制心の欠如を意味する。

モンタギューの行動の特徴の一つとして、セレスティナの行くところどこにでも出沒することが挙げられる。早朝彼女が一人で散歩中、若い女性の墓に哀れみを覚え、初めて詩を作る。セレスティナの感性がよく表れている場面である。彼女が、その詩を口ずさんでいると、いつから跡をつけていたのか、振り返るとモンタギューがいた。そして熱心にその詩を書いた紙をくれと迫る。また、スコットランド滞在中、彼女が夜一人で歩いていると、後に人影を感じたため、急いで逃げ出すと石に躓き転倒してしまう。心配そうに手を差し伸べたのは、時代遅れの衣装で羊飼いに変装したモンタギューであった。モンタギューの人物描写に、現代でいうストーカー(特定の個人に異常なほど関心を持ち、その人の意思に反してまで跡を追いつける者)に通ずる側面が織り込まれている点に興味深い。古典ゴシック小説の進化の過程において、その恐怖装置は、超自然が薄れて、やがて消え、あるいは超自然と自然の境が曖昧になり、人間の心の仕組みそのものに変容する過程がある。¹⁸ モンタギューのストーカー的行為もこの変容の一例といえるのではないだろうか。つまり相手に夢中になるあまり、常に自分の視界に相手を閉じ込めておきたいという願望は、行動に移されれば、結果的には、皮肉にも自分が相手にとって恐怖の対象になってしまう。この異常なほどの関心が恐怖装置なのである。モンタギューは自らの情念に支配された状態で、そこには相手の立場に立つ想像力の入り込む余地がないかのようなようである。情念が行動に表れた際、ヴァヴァサーは外向型で積極的に相手の領域に踏み込んでいくのに対し、モンタギューは、内向型で、セレスティナの困惑を知りながらも、陰から見ていただけでいいからと言いつつ、執拗で被虐趣味の傾向すら感じられ、自己破滅的である。いずれにせよ、作者はこれら二人の情念については、批判的に描写している。

では、感性と情念はどのような関係なのであろうか。ここで、シャーロットと親交もあった女性詩人ヘレン・マライア・ウィリアムズ(Helen Maria Williams)の、ただ一作の小説『ジュリア』(*Julia, A Novel*, 1790)を参照してみよう。この作品で、ウィリアムズは、男性の自滅的な情念よりも、他の人と心を合わせ、社会にも役立つような、新しい型の「女性の」感性を描きだそうとした。¹⁹ 感性と情念は、通常互いに矛盾する語として扱われる。妻の従妹ジュリアに心を奪われた、シーモアの情念は、男性の専制の一つの型として、次のように表現されている。

The region of passion is a land of despotism, where reason exercises but a mock jurisdiction; and is continually forced to submit to an arbitrary tyrant, who, rejecting her fixed and temperate laws, is guided only by the dangerous impulse of his own violent and uncontrollable wishes.²⁰

情念を一つの専制国家に例え、そこでは理性は見せ掛けの司法であり、独裁的な暴君は、確固とした節度のある法律を拒否し、自身の激しくて抑制できない願望の危険な衝動によってのみ動くのだとする。そして、そのような暴君に従うことを絶えず強要されるのだと、その犠牲になる者の立場から訴える。

一方感性については、次のように述べられる。

...in a mind where the principles of religion and integrity are firmly established, sensibility is not merely the ally of weakness, or the slave of guilt, but serves to give a stronger impulse to virtue...²¹

「信仰や高潔という行動の基準がしっかりと確立された精神においては、感性は、弱さと同類のもの、あるいは罪悪感の奴隷というだけでなく、善に対するより強力な動機としての役目をする」と肯定的に捉えられている。この物語では、感性は人間関係に不可欠の特異な力であることが最も強調されているとの解釈もある。²²

『セレスティナ』も『ジュリア』同様、女性の感性が強調されている。男性は、情念の衝動に従い行動するが、実生活には多くの困難がつきまとう。ヴァヴァサーは、最終的に健康と財産を失い、情念を抑制できない夫を持つエルフィンストン夫人は、夫の病気や事業の失敗で苦勞の多い人生を送るなどの例が示される。『セレスティナ』とほぼ同時期の作品において、感性と情念の対立が、描かれている点が興味深い。

(3) ウィロビー—感性と情念、そして理性

英文学者小池滋氏は、ゴシック小説の諸条件として、(1) 時間が過去、(2) 舞台がヨーロッパ大陸、特に地中海沿岸の国々、(3) 超自然現象、(4) 現実からの解放、逃避、(5) 人間の理性ではなくて情念 (passion) を扱う、の5点を挙げている。²³『セレスティナ』に照合すると、(2) フランスが舞台になる場面も多い、(4) ウィロビーが不在の期間が長く、旅を続ける生活である、(5) ヴァヴァサーやモンタギューの情念が強調されて扱われている点において、この条件を満たしているといえよう。

ウィロビーはゴシック小説のヒーローとしての要素を多く持つ人物である。ゴシック小説のプロットは複雑な家系が旅、あるいはその両方を軸に織りあげられているが、ウィロビーの場合は、旅の動機が、複雑な家系ではないかという疑惑を晴らすためであるから、これに当てはまるだろう。また、ゴシック小説の定番である、旅の終わりに主人公は重大な認識を得る点も、ウィロビーに当てはまる。ウィロビーは、苦勞の末、とうとうセレスティナの出自を突き止めるのである。また、主人公たちはみな、現実世界の旅人であると同時に自らの心の暗闇の恐怖に駆られて追いかけて、逃走し、放浪する旅人である²⁴ 点もウィロビーは該当する。セレスティナが本当の妹かもしれないという疑惑が起こり、自暴自棄になったウィロビーは、一度は親の決めた婚約者と結婚する決意はした。しかし、一族のプライドのために自らの自由を売るのが愚かなことに感じ始め、現実逃避の旅に出る。「地上の放浪者」(“a wanderer on earth,” 412) になっても構わないと、次から次へと場所を移動する生活を続ける。

ウィロビーはまた、“novels of sensibility”のヒーローとしての要素も併せ持っている。セレスティナから全面的に信頼を受けており、そのことだけで彼の徳性は保証されるように読者は感じる。若い頃には、勉学に励んでおり、文学にも造詣が深い。幼い頃より病弱で、彼の転地療養がきっかけとなり、セレスティナを見出すことになったのだが、その後も衝撃的な出来事の後、何度か高熱に苦しむ場面が登場する。ウィロビーに関しては、身体的症状の描写が多いように思われる。“novels of sensibility”では、鋭敏な身体性がそのまま純粹で高邁な精神・高德の証しとされる。²⁵ ウィロビーは作者からこれらの徳を賦与されていると考えてよいであろう。

“novels of sensibility”のヒーローは、『感性の人』のハーリーやオリヴァー・ゴールドスミス (Oliver Goldsmith) の『ウェイクフィールドの牧師』(*The Vicar of Wakefield*, 1766) に見られるように、往々にして、他人の奸計が見抜けず、自分の利益を追求できないばかりか、防衛本能に欠け、騙されてもお他者の善意を信じる社会的に未熟で無能ともいえる愚か者である。²⁶ しかし、ウィロビーは、“his natural good sense” (410) とあるように、理性的な面も持ち合わせている。有能ながら、貧困に苦しんでいたカスカートを管理人として採用したのは、ウィロビーの感性の表れであるが、自分の不在中もカスカートに任務の指示を送るなど、実務的な一面もあり、全く無責任という訳で

はない。

ウィロビーの場合、全編を通じて、葛藤に苦悩する場面の描写が延々と続く。亡き母との約束で、従妹のミス・フィッツフェイマンとの結婚を決意し、セレスティナをあきらめようと苦しむ。しかし、ヴァヴァサーの勧めもあり、セレスティナにプロポーズし、ようやく彼女の承諾を得られたが、結婚式の前日に届いた一通の手紙が、再び彼に葛藤を与える。セレスティナが異父妹であると聞かされ、真実を確かめるため旅に出るが、有力な情報は得られず、セレスティナがヴァヴァサーと婚約する噂を聞き、強い衝撃を受け、イギリスに戻る。今度はセレスティナがヴァヴァサーでなくモンタギューと婚約したという間違っただけの噂に翻弄され、再び苦悩する。絶望を抱きながらも一縷の望みをかけ、大陸へ真相究明の旅に向かう。偶然にもセレスティナが異父妹でないことを突き止め、彼女の出自も確かめられたが、彼女はモンタギューと結婚したに違いないと思い、ここでも葛藤に悩む。最終的にセレスティナと結婚するまで、悩み、考え込むといった、感情の上では常に同じような反応が繰り返される。

妹からの手紙で、セレスティナとモンタギューの婚約の噂を知った時、ウィロビーの心理的衝撃は大きなものだった。

... another letter from his sister... threw him into a state of mind bordering on distraction: reason, which had long fruitlessly contended against this fatal, and perhaps guilty attachment, now seemed tired of contention so hopeless, and his mind became a chaos of conflicting passions, all equally destructive to his mental and bodily health. (414) (下線筆者)

ウィロビーも、ヴァヴァサーやモンタギュー同様、情念は強く感じているが、彼らと異なる点がある。情念を行動の動機として、積極的に突き進むヴァヴァサーや、情念にふけるモンタギューは、ある意味ではゴシック小説の典型的な登場人物といえる。つまり、理性で物事を判断したり、行動したりすることはなく、愛や憎しみにしても非常に強烈な情念だけの愛や憎しみになってしまう、それらを知性や常識によって処理することはない。その結果一つの型にはまった人間になりがちである。²⁷ この二人が同じ女性を巡り決闘までしてしまうのは、二人共似たような精神構造を持っているからとも考えられる。ウィロビーが彼らと違う点は、情念を理性と対照させ、考える点で、これがウィロビーの葛藤の原因になることも多い。さらに感性も加わって、ヴァヴァサーやモンタギューより、複雑な人物になっている。

この作品では、女性の登場人物の場合には情念を強調されておらず、理性によって抑制可能な感性が強調されている。女性の登場人物が現実主義者である印象を与えるのは、こうした感性の描き方のためであろう。しかし、ウィロビーの態度、例えば結婚式前日の突然の出発、長期の不在、セレスティナに対する冷たい態度、などから、物語の途中でヒーローであることを確認するのが難しいのは、その人物設定に情念と理性、そして感性を賦与したことに影響している。ある時は情念の衝動に従い突発的な行動を取り、ある時は感性が身体的症状に表れ、病気になり、またある時は情念と理性との葛藤に苦悩する。この人物像は、ゴシック小説と“novels of sensibility”の両ジャンルのヒーローの融合から生まれたといえるが、この物語は、ウィロビーの通過儀礼を描いたとも解釈できる点で、ビルドゥングスroman (Bildungsroman) の形式も加えることが可能であろう。²⁸

結

感性の視点から、作品を検討していくことにより、多くの点が浮き彫りになった。

まず、感性そのものの考察であるが、この作品では、女性の理性によって抑制可能な感性の重要性が強調されている。男性登場人物の感性と比較対照した場合、男性については優れた感性の持ち主があまり登場しないため、女性の感性が際立つように見える。男性は感性というよりも、情念の衝動に従い、行動する傾向が強調されて描かれており、その実生活には多くの困難がつきまとい、女性がその犠牲になる様子も語られる。しかし、見方を変えれば、男性の感性についてかなり詳細に描き分けられており、様々な人物を設定することで小説の面白味は増している。

作品を感性について分析することにより、感性があるかないか、強いかどうかという単純な問題だけでなく、感性を正常に機能させているかという問題や、情念や理性というまた別の心の動きにどう対処していけばいいのかなど、感性のもつ捉えがたい様々な側面があぶりだされたといえるであろう。感性の複雑さが改めて明らかになる。

ジャンルとしては、“novels of sensibility”であるが、物語の形式、題材は当時大流行したゴシックに倣いながら、ロマンスの要素のみならず、リアリズムも取り入れ、ノヴェルの要素も織り込まれている。また、ビルドゥングスromanの形式とも解釈可能である。さらにフェミニズム的、政治的関心も作品に盛り込まれている。これは生活のために作品を書かなければならなかった作者が、常に市場を意識し、大衆の好みに合わせて、作品を作り上げたことに由来しているとされるが、²⁹ 多面的な方向からの詳細な描写は、当時の文化や生活の理解にも役立つ。感性の分析から、小説の形式や特質に迫り着く点が興味深い。

この作品の書かれた1790年代は、フランス革命の影響で、イギリスにも感性の擁護派と反対派が現れ、それぞれがたくさんの作品を残した。個々の作品がどのように感性を描き出しているかは、小説の形式や時代の影響など様々なものと有機的に結びついた興味深いテーマである。

注

¹ “sensibility.” *Oxford English Dictionary*. 1970ed.

² Adela Pinch, “Sensibility”, *Romanticism : an oxford guide*, ed. Nicholas Roe (Oxford : Oxford UP, 2005) 49.

³ Janet Todd. *Sensibility : An Introduction*. (London : Methuen, 1986) 7. “More recently the word [sensibility] has come to denote the movement discerned in philosophy, politics and art, based on the belief in or hope of the natural goodness of humanity and manifested in a humanitarian concern for the unfortunate and helpless.”

⁴ 泉谷周三郎、『ヒューム』(清水書院、1991年) 75-9頁。

⁵ Pinch, 52.

⁶ Ann Jessie Van Sant, *Eighteenth-century sensibility and the novel* (Cambridge : Cambridge UP, 1993) 1.

⁷ Pinch, 50-1.

⁸ Pinch, 51.

⁹ Pinch, 59.

¹⁰ Rosemary Campbell, *Oxford Companion to the Romantic Age*, ed. Iain McCalman (Oxford : Oxford UP, 1999) 709.

¹¹ Elizabeth R. Napier, *The Failure of Gothic* (Oxford : Oxford UP, 1987) 26.

¹² Carroll Lee Fry, *Charlotte Smith, Popular Novelist* (New York : Arno Press, 1980) 15.

¹³ Loraine Fletcher, The Reception and Influence of *Celestina*, *Celestina* by Charlotte Smith

(Peterborough : Broadview, 2004) 543.

- ¹⁴ Charlotte Smith, *Celestina*. Ed. Loraine Fletcher. (Peterborough : Broadview, 2004). () 内のページ数は、この版からの引用である。
- ¹⁵ Fletcher, Introduction, *Celestina* by Charlotte Smith (Peterborough : Broadview, 2004) 15.
- ¹⁶ Frederick Garber, Introduction, *The Italian* by Ann Radcliffe (Oxford : Oxford UP, 1981) viii.
- ¹⁷ Garber, ix. 「たとえば恐怖を経験できるのは、ヒーローやヒロインだけでなく、召使も同様だが、その恐怖を崇高 (sublime) の域まで変化させられる sensibility は、召使には与えられていない」
- ¹⁸ 杉山洋子他、『古典ゴシック小説を読む』(英宝社、2000年) 9 頁。
- ¹⁹ Peter Garside, Introduction, *Julia ; A Novel*, vol. 1, by Helen Maria Williams, (London : Routledge /Thoemmes Press, 1995) xvi.
- ²⁰ Helen Maria Williams, *Julia ; A Novel*, 2 vols. (New York : Garland, 1974), 2 : 18.
- ²¹ Williams, 1 : 178.
- ²² Garside, xv.
- ²³ 小池滋、『ゴシック小説を読む』(岩波書店、1999年) 85頁。
- ²⁴ 杉山洋子他、11頁。
- ²⁵ 久守和子、『イギリス小説のヒロインたち』(ミネルヴァ書房、1998年) 180頁。
- ²⁶ 久守和子、200頁。
- ²⁷ 小池滋、86頁。
- ²⁸ Garber, x. ラドクリフの作品は、主人公の成長を描くという点で *Bildungsroman* の形式に当てはまると分析している。
- ²⁹ Robert Donald Spector, *The English Gothic* (Westport : Greenwood Press, 1984) 111.